

西ドイツと日本の中にみられる英語系外来語の意味 差異：その2

根本，道也
九州大学

<https://doi.org/10.15017/6796136>

出版情報：言語科学. 17, pp.31-45, 1982-03-20. The Group of Linguistic Studies College of
General Education, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



西ドイツと日本の間にみられる 英語系外来語の意味差異

— その 2 —

根 本 道 也

(「言語科学第16号」1981に掲載の同題「その1」に続く)

⑳ Goal (〔中〕 -s / -s)

英語 goal の主な意味は「㊶目的、目標、目的地。㊷(競技の)決勝点。㊸(サッカーなどの)得点場所、ゴール。㊹ゴールに入れて得点すること」である。日本にはこのうちまず㊶と㊷の意味を伴って明治時代に入ってきた。そして大正時代にサッカーやバスケット競技の伝来と共に㊸や㊹の意味が加わった。戦後になると結婚披露宴のスピーチなどで、「A君とB子さんはかくしてついにゴール・インするに到ったのであります」のような使い方もされるようになった。この「ゴール・イン」はもちろん和製英語である。

さて、ドイツ語の Goal はどうかというと、主にオーストリアとスイスでのことだが、もっぱらサッカー (Fußball) のゴールを表わすのに使われている。西ドイツや東ドイツのサッカーの試合では Goal よりも Torの方が一般的に使われている。

㉑ Grill (〔男〕 -s / -s)

名詞としての英語 grill は大体次の三つの意味で使われる。「㊶(肉などを焼く)焼き網、(焼肉用の)鉄板。㊷(焼き網で焼いた)焼き肉料理。㊸グリルルーム、簡易食堂。」日本語で「グリル」といえばたいていの場合、「(特にホテルなどの)洋風の軽食堂、簡易レストラン」を指す。次いで「串焼きの肉料理」を表わす。ドイツ語になった Grill はこれとは逆に上の㊶すなわち「焼き網」或はそれを置く「炉」そのものを主として指し、焼肉料理は Grillgericht、その料理で客をもてなすパーティは Grillparty、ホテルやクラブのグリルルームは Grillroom で表わされる。

英語 grill は動詞(「(肉などを)焼き網で焼く」)にも使われるが、つづりがこのままではドイツ語として動詞に使えない。そこで語尾 -en を付けて動詞 grillen ができた。これの過去分詞が「網焼きの」という意味の形容詞として肉料理にしばしば付けられる。例えば、ein gegrilltes Hähnchen, gegrillte Schweinshaxen のように。

③① Hearing ([中] - [s] / -s)

ドイツ語となった **Hearing** は英語 **hearing** の数種の意味のうち法律関係の意味だけを汲み取っている。すなわち「(主に政治関係の)査問委員会、公聴会」を指す。日本でも最近では「公聴会」の意味で使われることもあるが、一般的にはまだ英語 **hearing** の基本的意味を応用した、いわゆる「(外国語学習における)ヒアリング」を指すことの方が多い。

③② high ([形])

英語の **high** はそもそも「(高さが)高い、(程度が)高い、(価格が)高い、(身分・地位が)高い、(音調が)高い」を基本的意味とし、そこから派生的意味が数々生じている。派生的意味の一つに「(酒・麻薬などに)ふらふらしている、酔っている」というのがある。ドイツで **high** といえばもっぱらこの種の派生的意味、すなわち「麻薬によって多幸症の状態にある、陶酔状態である」の意味に使われる。これに比べると日本語としての「ハイ」は **high** の基本的意味に忠実である。ただ、単独で使われることは少なく、ハイ・センス、ハイ・スピード、ハイ・ピッチ、ハイ・ファッション、ハイ・ウェーなどのように合成語の一部として使われるのが普通である。「ハイ」を「高い」という意味で単独に使うのは野球でピッチャーの投球についてぐらいのものであろうか。同じ **high** でも日独間には「投球の結果」と「麻薬の結果」の違いがある。

③③ Hit ([男] -[s] / -s)

名詞としての英語 **hit** がもつ主な意味は「㊤命中、当り；一発、一撃。㊦ぶつかり、衝突。㊧(野球などの)ヒット。㊨(歌謡曲などの)大当り、成功、ヒット。㊩うがった言葉、当てこすり」などである。日本には大正時代にまず㊧の意味が野球と共に入ってきた。そして昭和になってから㊨の意味でも盛んに使われるようになった。一方、野球のないドイツには㊨の意味だけで **hit** が受け入れられており、しかも「大当り」が流行歌に直結して「ヒット曲」の意味で使われることが多い。ラジオやテレビの **Hitparade** はわが国と同様ドイツの若者たちの人気番組である。

③④ Hot ([男] -s / -s)

英語の **hot** は主に形容詞として使われる。その他わずかに副詞と動詞の用法があるが、名詞として使われることは少ない。それなのにドイツ語になった **Hot** が男性名詞とされているのは、この **Hot** がそもそも **hot jazz** のドイツ語化した形 **Hot Jazz** の略称であり、そして **Jazz** はドイツ語の中で男性名詞とされているからである。したがって **Hot** だけで「ホット・ジャズ或はその演奏法」を意味することも多いわけである。

感情を激しくかき立てるジャズ演奏を形容する **hot** のこの新しい用法は日本へも同時に入ってきて、ホット・ジャズ、ホット・ブレーなどと言う。

日本ではさらにホット・ウィスキー (< **hot whisky**)、ホット・オレンジ (< **hot orange juice**)、

ホット・コーナー (< hot corner 野球の3塁の守り)、ホット・ジュース (< hot juice)なども取り入れて、これらの類推からホット・コーヒーという和製英語もできた。その上、喫茶店などではホット・コーヒーを簡単に「ホット」と呼んだりしている。西ドイツでHotといえば Hot Jazz のこと、日本でホットといえば「ホット・コーヒー」というわけである。いずれも英語本来の使い方ではない。

私たちはまた「ホット・ニュース」という言葉も日常的に使う。この場合のホットは英語 hot のもつ「発表されたばかりの、ほやほやの、最新の」という意味そのままであって、和製ではない。

③⑤ Jamboree ([中] - [s] / -s)

英語の jamboree は大体次の三つの意味をもつ。「①にぎやかな宴会、飲みや歌えの酒宴。②全国 的または国際的な規模のボーイスカウト大会。③(政党・スポーツ団体などの)大会、お祭り騒ぎ。」日本語のジャンボリーは上の②すなわち「ボーイスカウトの野営大会」のみを意味する。これに対して、ドイツ語になった Jamboree はボーイスカウト関係の他に、上記①の意味も汲んで「ダンスや歓楽のための集会」をも表わす。

③⑥ Jockei または Jockey ([男] -s / -s)

英語 jockey が名詞としてもつ主な意味は次の二つである。「①競馬の騎手。②(飛行機・自動車などの)運転者、操縦者。」ドイツで Jockei または Jockey というときは、もっぱら上の①だけを意味している。日本語の「ジョッキー」も明治時代から「騎手」と同意に使われてきた。最近ではしかし、ディスク・ジョッキーの司会者のことも「ジョッキー」と呼んでいる。こちらは英語 disc jockey を勝手に簡略化した呼び名である。

③⑦ Jumper ([男] -s / -)

英語には二つの jumper がある。 jumper¹ は「跳躍する人；(陸上・スキーなどの)ジャンプ競技の選手；障害馬」を表わし、 jumper² は「①ジャンパー・ドレス。②(水夫・工具などが着る)上っ張り。③(英)頭からかぶるセーター」の意味をもつ。日本語になった「ジャンパー」は上記 jumper¹ からは「(スキーの)ジャンプ競技の選手」のみを、そして jumper² からは①②③の三種とも受けついでいる。これに対して、ドイツ人が Jumper というときは上記 jumper² の①だけを意味する。発音はドイツ語風であったり、英語風であったりする。

③⑧ Lobby ([女] - / -s または Lobbies)

名詞としての英語 lobby がもつ主な意味は「①公共建造物などの廊下・入口の間。②(劇場・ホテルなどの)休憩室。③(院外の)陳情団、圧力団体。④(英米議院で議員が院外者との会見に用いる)控えの間。⑤(英国下院の)投票者控廊下」である。日本語の「ロビー」が受けついで最も大きな意味は上記の②であろう。「ホテルのロビーで会いましょう」といった具合によく使われる。

なお、議院筋の会話では⊖の意味で使われているようだ。

一方、ドイツ語として用いられる **Lobby** は日本語の「ロビー」とは逆に、むしろ議院関係に限って使われる点が特徴的である。すなわち上記の⊕または⊖の意味にだけ使われるわけである。したがって、「ロビーで会おう」と言われた場合、日本人は「ホテルの休憩室」を思い浮かべ、ドイツ人は「議院の控えの間」を念頭に置くことも十分にあり得る。

③⑨ **Military** (女 -/s)

英語の **military** は、言うまでもなく、形容詞としては「陸軍の；軍隊の；軍人の」であり、名詞としては「軍隊；(集合的に：)軍人」を表わす語である。日本語の「ミリタリー」もほぼ同様の意味を含んでいる。しかし日本では、上記の意味そのものよりも、服装の「ミリタリー・ルック」のような用法の方がなじみが深い。このような用法に慣れている日本人にとってはドイツ語 **Military** のもつ意味が想像できまい。それは「乗馬の多種目競技」なのだ。

④⑩ **Minicar** (男 -s / -s)

英語の **minicar** を字義通りドイツ語に移せば **Kleinstwagen** となる。**Wagen** が男性名詞であることから、**Minicar** も必然的に男性名詞とされたのであろう。**minicar** はもともと **miniature car** の略で、エンジン排気量 500 cc 未満の超小型自動車の総称であった。英語の辞典には「⑩小型自動車。⑩小型自動車の模型」とある。ドイツの辞典をみると、ほとんどが **Kleintaxi** 或は **Kleines Taxi** としている。中には「排気量の 900 cc クラス、低運賃」と説明を付けたものもある。第二次世界大戦後、敗戦国のドイツではスクーターを三輪や四輪にして安定性を高め、それに幌をかぶせたもの (**Kabinenroller**) が商品化されたという(「日本国語大辞典」)。完全に **minicar** の範疇に入るこの超小型車が戦後しばらくは低運賃のタクシーとして愛用されていたのであろう。しかしその後の経済復興と共に姿を消して行き、今ではドイツの町では **Kleintaxi (Minicar)** の実物を見ることは難しい。

日本ではふつう排気量 360 cc 以下の車(ホンダ N360、スバルなど)をミニカーと呼んでいるそうだが、一般的には小型模型自動車(ミニチュア・カー < **miniature car**)の略称としての「ミニカー」の方が親しまれている。日本の子供たちに人気のあるこのミニカーのことをドイツ人に正確に理解してもらうためには **Miniatur-Autos** または **Autominiaturen** と言わねばならない。ドイツで **minicar** と言うと「実用の超小型車或は小型タクシー」と受け取られてしまう。

④⑪ **Onestep** (男 -s / -s)

one-step とは 20 世紀初めごろアメリカで生まれた 2/4 拍子の軽快な社交ダンス及びその曲の名称である。第二次世界大戦後早々に西ドイツと日本でも流行した。丁度当時の **blues** や近年の **rock and roll** などと同じことで、世界の共有物となり、その名称は世界の共通語になったと言ってよい。

その限りではドイツ人と日本人の間で誤解が生じる恐れはないのだけれども、日本では「ワン・ステップ」にもう一つの使い方がるのでここに取り上げた。例えば「多難を予想される改革へのワン・ステップ」のように、私たちはなにか息の長い仕事をするときの「第一歩」或は「小休止」という意味に使うこともある。

④② Pacemaker (男 -s / -)

英語の **pacemaker** が表わす意味は「㊦練習・競争などで先頭立ってペースを作る走者。㊧(競馬で)他の馬の歩調を主導する馬またはその騎手。㊨主導者、指導者。㊩脈拍調整器」である。ドイツで **Pacemaker** と言うときは上記㊦～㊩のうち競馬関係の㊧と医学用語としての㊩だけを意味する。日本でも㊩の意味で使われることはあるが、最もよく知られているのは陸上競技の「ペース・メーカー」である。中・長距離競走で無名の選手が途中までハイペースでトップを走り、最後は力尽きて下位に落ちることがある。そんなとき「彼はペース・メーカーとしての役割を十分に果たしてくれました」と解説者に褒められる。ドイツでは競争馬またはその騎手に使い、日本では陸上競技の選手に使うので、その違いは留意すべきであろう。

④③ Pamphlet (中 -[e]s/-e)

英語の **pamphlet** は「㊦仮りとじの小冊子。㊧(時事問題に関する)小論文、小論説」の意味に使われる。日本語の「パンフレット」は㊦の意味を汲み、「簡単なカタログ本、商品・会社などの宣伝・紹介のための簡易資料」なども含めてかなり広義に使われる。これに対してドイツ語の **Pamphlet** はもっぱら「中傷文書、誹謗書」の意味で使われる。

英語の **pamphlet** が日本へは直接入ったのに対して、ドイツへはフランス経由で入ったためにこのような意味の違いが生じたものと思われる。

④④ Pile (男・中 -s / -s)

英語には一般的なものだけでも三通りの **pile** がある。それぞれの名詞の主な意味をまず調べてみよう。**pile**¹ は「㊦(物の)積み重ね。㊧多数、大量；大金、富。㊨大建築物〔群〕。㊩積み薪。㊪原子炉。」**pile**² は「㊦(建物の土台用としての)くい。㊧くさび形をした矢じり・紋。」**pile**³ は「㊦(柔らかい細い)毛。㊧羊毛。㊨(じゅうたんなどの)けぼ。㊩けぼのある織物、パイル織物。」ざっとこのようになる。以上合計11種の意味のうち三つを日本語の「パイル」は受け継いでいる。すなわち「パイル織物；(建築用の)シート・パイル；原子炉」である。一方、ドイツ語としての **Pile** はただ一つ「原子炉」のみを表わす。

「原子炉」をドイツ語で言えば **Kernreaktor** であり、これで十分に通用する。しかしアメリカと技術提携している産業の作業現場では自ずと英語名の方が多く口にされるはずである。

④⑤ Rekord (男 -[e]s/-e)

名詞としての英語 record はおおよそ次の意味で使われる。「①記入、記録〔すること〕；記録文書；経歴。②思い出の物(人)。③音盤、レコード。④(特に運動競技などの)記録、レコード、最高記録、新記録。」ドイツ語になった Rekord は上記の④、つまり「スポーツの最高記録」だけを意味する。日本でも「A選手がレコードを達成した」という言い回しはよくする。しかし、日本人が「レコード」と聞いてまっ先きに思い浮かべるのは「音盤」の方のレコードではあるまいか。他に、①の意味で使うこともあるが、頻度は遙かに少ない。それに①と④は日本語に置きかえても不自然ではないが、②はやはり「レコード」としか言い表わしようがない。「音盤」と言われても若い人にはピンとこないだろう。この「レコード」をドイツでは日本語の「音盤」に当たる純粹のドイツ語 Schallplatten で言い表わしている。

④⑥ Safe [seif] (男・中 -s/-s)

英語の safe は名詞としては「①〔安全〕金庫。②(特に食料品などの)貯蔵庫」の意味をもつ。ドイツ語の Safe はこのうちの①だけを表わす語として使われる。一方、日本語の「セーフ」は名詞 safe には関係なく、逆に形容詞 safe の最も中心的な意味「安全な」を名詞化した意味をもっている。まずは「(野球の)セーフ」である。テニスで使うこともある。これから転じて、「安全になにごとかの目的を果たすこと」の意に使ったりもする。

④⑦ Scout (男) -[s] / -s

英語の scout は名詞として次の意味をもつ。「①斥候兵、偵察艦(機)。②内偵者、偵察者。③((スポーツ))敵状内偵者；スカウト、選手勧誘係。④偵察。⑤ボーイスカウト(Boy Scout)、ガールスカウト(Girl Scout)。」このうち⑤の意味だけをドイツ語の Scout は受けついでいる。ドイツ語ではまた同じものを Pfadfinder とも言う。この方は英語の scout と同意の pathfinder を借用訳したものである。日本語の「スカウト」もドイツ語の場合と同じく、上記⑤の意味で使われることは言うまでもない。だがそれよりも一般的なのはプロ野球や芸能界で使われるあの「スカウト」である。日本ではスポーツ界に限らず芸能界にもこの語を応用している。しかもその意味は「新人タレントを発掘すること」であると共に「それを仕事とする係」でもある。

④⑧ Setter [zɛtər] (男) -s/-

東京オリンピック以後日本ではバレーボールが花形スポーツの一つとなって、テレビでもよく試合の中継放送をするようになったので、「セッター」という外来語は全国の人々の耳に慣れ親まれていく。これはボールを set する人、つまりスパイクするためのトスをあげる選手のことである。しかし「セッター」と言えば昔から獵犬の品種名としても知られている。こちらは「獲物を鼻先で set (指示)する」ことからきた名称である。ドイツ語の Setter は今でも獵犬の品種名にだけ使われる。

④⑨ Settlement ([中] -s / -s)

私たちが「セツルメント」と聞けば、まず社会事業としての「セツルメント」を想起する。それは、生活困窮者の多い地区で、住民との人間的接触をはかりながら行なわれる社会事業のことであり、またそのための診療・授産・託児所などの施設も意味する。実は日本語の「セツルメント」が引き継いだこの意味は英語 settlement のもつ派生的意味の一つにすぎない。一方、ドイツ語になった Settlement は本来の意味である「定住、入植」と派生的意味の一つ「植民地」を受け継いでいる。日本語の「セツルメント」とドイツ語の Settlement とは結局意味が重なり合わない。

⑤⑩ Sketch ([男] - [es] / -e[s] または -s)

英語の sketch は ①(写生図(画)、下絵、素描) ②(本などの)下書き、草案 ③(事実・事件などの)概要 ④(小説・随筆などの)小品、短編；(音楽)スケッチ ⑤短い劇、寸劇 を表わす。そして日本語の「スケッチ」が含む意味はこのうちの①②と③である。中でも絵画に関する用法が最も一般的であろう。ドイツ語には Sketch と同系統の Skizze ([女] - / -n) という語があって、これが上記の①②③の意味をカバーしている。したがって最後の⑤、すなわち「(風刺の利いた)寸劇」だけを英語系外来語の sketch で表わしている。これにはドイツ語化したつづり Sketsch ([男] - [e] s / -e) もある。

同一の英語に由来する日本語の「スケッチ」とドイツ語の Sketch は、発音はそっくりであっても、お互いに違うことを意味しているわけである。

⑤⑪ Slip ([男] -s / -s)

英語には三通りの slip がある。まず slip¹ の最も基本的意味は自動詞として「すべる」、他動詞として「すべらせる」、名詞として「すべること」である。これを基にして、数々の派生的意味がある。日本語の「スリップ」は自動車などが急ブレーキをかけたときのあの「横すべり」の意味に使われることが一番多い。次に婦人用下着の「スリップ」でなじまれている。これはワンピースなどをすると着やすくするための下着であるから、他動詞「すべらせる」から派生した衣服名と考えられる。英語の slip にももちろんその意味はある。ドイツ語では同じものを Unterrock と呼んでいる。だがこの Slip も現代ドイツ(第二次世界大戦後)では下着名に使われることが最も多い。下着は下着でも日本語のスリップが表わすものとは違って、「(男用の)ブリーフ、(女用の)ショーツ」を意味する。これは「上に着用するものをするりと着やすくする」意味に由来するものなのか、それとも「するりとはける、或は脱げる」という意味から来ているものなのか、よくは分らない。ドイツのある町角の看板に次のような宣伝文句が書いてあった。“Slips statt Schlips” (「ネクタイの代りにスリップを」) この場合のスリップはもちろんシュミーズと同意のスリップではなくて、腰部にびったりはまる小さい下着、すなわちショーツやブリーフのことである。上記の看板はなにもこの種の

下着を首に飾れと推めているわけではなく、単なる語呂合わせを宣伝に利用したにすぎない。

ドイツ語の **Slip** にはその他に英語 **slip**¹ のもつ海事用語、航空用語、機械用語の「スリップ」と **slip**² の意味の一つである「伝票」も入っている。

⑤② **Slump** (男) - [s] / -s)

ドイツ語の **slump** は、日本語の「スランプ」と同じく、英語 **slump** が名詞としてもつ意味の一部を受けついでいる。英語の **slump** は主に次の四種の意味に使われる。「㊴どさっと落ちること。㊵減退、衰退。㊶株価の下落期、(特に短期で小規模の)不景気、不況。㊷((主に米)不調、不振、元気(気力)の衰え、意気消沈。」このうちドイツ語の **Slump** が受けついだのは金融関係の㊷の意味だけである。日本語の「スランプ」も金融関係ではその意味に使われるが、最も広範囲に使われるのは上記の㊷すなわち「(心身の調子の)一時的な不調、不振」の意味である。こちらのスランプはドイツ語では **Tiefpunkt** という。

⑤③ **smart** (形)

現在私たちが日常生活の中で「スマート」という言葉を使うとき、それは「格好が良い、あか抜けした、さっそうとした、気のきいた」の意味に使っている。いわゆる「やばったい」の反対語として主に服装や動作について言っている。例えば「スマートな紳士」とは、その服装が瀟洒で、あか抜けしていて、動作振舞いもさっそうとして、小意気な感じのする紳士のことである。日本語の「スマート」が持つこの意味は英語 **smart** が本来もつ意味の一部にすぎない。形容詞としての英語 **smart** の意味をまとめると「㊴(痛みなどが)ひりひりする。㊵(打撃などが)激烈な。㊶(動作などが)きびきびした、活発な。㊷(行動において)機敏な、てきぱきした。㊸鋭敏な頭脳をもった、頭の回転の早い、賢い、利口な。㊹抜け目のない、こすい。㊺才気のある、気のきいた、機知に富んだ。㊻身なりの整った、りゅうとした、さっそうとした、(社会的に)洗練された、あか抜けした。㊼ずうずうしい、生意気な」のようになる。現代日本語の「スマート」は最後から二番目の㊸の意味だけを表わしている。

ところで、昔の大日本帝国海軍では海軍軍人のあるべき姿を「スマートで、眼先が利いて 几帳面負けじ魂 これぞ船乗り」という標語で表わしていた。ここにくたわれた「スマート」は今の私たちが巷で口にする「スマート」の意味とはいささか異っている。たしかに昔の海軍さんは服装の上でもスマートではあった。だが、上の標語にくたわれた「スマート」の真意はこうである。「(動作や判断が)機敏で、てきぱきと、手際よく事を処し、終始きびきびと行動する」こと、要するにひと言でいえば「敏速」に主眼を置いた表現であった。英語の **smart** がもつ上記の意味のうち㊵㊷㊸あたりをひっくるめた意味なのだが、実は明治時代に「スマート」が外来語として入ってきた当時は、こちらの意味の方が主だったのである。

さて一方、現代ドイツ語における smart の第一義は「有能な、腕の立つ；機敏な、活発な；聡明な、賢い」である。やはり上記の㊦㊧㊨から来ているが、ニュアンスの重点は動作よりも仕事上の手腕や才能に置かれている。しかも、今世紀の初めに smart がドイツ語に入った当時から現代までずっとこの意味が第一義として使われている。新しく加わった第二義は流行の服装などに関して「洗練された、あか抜けした」の意を表わす。この方なら現代日本語の「スマート」とほぼ一致する。

㊩ Smoking (男 -s / -s)

英語の smoking 「㊩ 煙ること。㊪ 発煙。㊫ たばこを吸うこと」の意味に使われる。日本語としての「スモーキング」は上記㊫の意味をもっており、「ノー・スモーキング」のような形でよく使われる。ドイツでは「喫煙」を表わす Rauchen という語が社会一般に定着しているので、Smoking は別の意味で使われている。すなわち smoking jacket を指す。喫煙服とでも言おうか、くつろいで喫煙するときに着る略式礼装で、別名タキシードと言われる上着のことである。日本語の「スモーキング」もこの意味で使うことはあるから、この意味に限っては日本語の「スモーキング」とドイツ語の Smoking は同意と言えよう。

㊬ Speaker (男 -s / -)

英語の speaker はおおよそ次の五通りの意味に使われる。「㊭ 話す(語る)人。㊮ 演説者、弁士。㊯ (米国・英国の下院、その他議会の)議長。㊰ 拡声器、〔ラウド〕スピーカー。㊱ 演説選集本。」このうち㊮の意味を日本語の「スピーカー」は受け継いだ。日本の外来語辞典にはさらに㊭と㊯の意味も載せてはあるが、それは明治時代にこの語が入ってきた頃わずかに知識階級の間で使われていたにすぎない。当時からわずか百年の間にラジオ、ステレオ、テレビなど電気音響器具は驚くほど発達し、今ではそれらの電気製品なしには私たちの日常生活は成り立たないほどになっている。生活用品の変化に伴って言葉の意味も自然と変遷する。私たちが今「スピーカー」と言うとき、「話し手」或は「演説者」を意味することはほとんどなく、99パーセントは loudspeaker のことである。次々と生まれる「スピーカー・システム」、「スピーカー・ユニット」のような新造語の「スピーカー」が、何の疑いもなく loudspeaker の意味で使われていることから、その事情がわかる。

これに対してドイツ語の中で Speaker という語が使用される場合は、もっぱら上記の㊯「(米国・英国の下院、その他議会の)議長」の意味である。そして loudspeaker のことは、それと同系統のドイツ語 der Lautsprecher で言い表わされている。

㊲ Spoon (男 -s / -s)

spoon という英語は「㊳ さじ。㊴ さじのような道具。㊵ ゴルフのスプーン(3番ウッドの別名)」の意味で使われる。日本には明治時代に、「洋食用のさじ」と「ゴルフの3番ウッド」の意味を伴ってこの語が伝来し、そのまま現在まで続いている。ただ、使用頻度から言うと、明治と現代とは大

きな差がある。洋食がまだ庶民には縁遠いものであった昔に比べると、洋食が庶民の食生活に普及した今では、「スプーン」もまったく日常語の一つになってしまった。ゴルフに関しても同様のことが言える。

一方、ドイツ語になった **Spoon** はゴルフ用語としてしか使われない。食事用の「さじ」は頑として **der Löffel** である。

⑤⑦ **Sport** (男) - [e]s / -e)

今や世界の共通語になっているこの言葉に意味の差異など起り得ようはずがない、と一見思われる。ところが私たち日本人は「スポーツ」という語を使うときに特別な意識を働かせるときがある。それは日本の伝統的格闘技を語るときによく現われる。「日本の相撲はスポーツではなく、文化財である」と横綱審議会高橋義孝委員長は先日記者団に語った。この文句は力士たちに相撲本来の心構えを喚起する意味で語られ、新聞の読者もまたそれに共感を覚えた。相撲には「スポーツ」という言葉の枠を超える何かがあると日本人は皆思っており、またそうであり続けることを期待している。「スポーツとしての少年剣道」とか「スポーツとしての学校柔道」といったうたい文句もよく聞かすが、なぜ「スポーツとしての」という規定詞を敢て付けなければならないのか。やはり本来の剣道や柔道には「スポーツ」の概念では包みきれない何かがあるという自然的意識が日本人の心に付着しているからに他ならない。

sport という語は辞典の説明にもあるように、どうしても「(休養・娯楽のために行なう)運動・競技」という気持が付きまとう。欧米から伝来した野球、テニス、ゴルフなどをごく自然に「スポーツ」と呼ぶ私たちが、相撲、剣道、柔道、空手のことになると簡単に「スポーツ」の一語で片付けることにこだわりを覚える。後者の肝要事は肉体の鍛錬を通じての精神修練であり、その究極の姿は様式美である。それは日常の実用性をはるかに超えた、磨ぎ澄まされた美しさである。一切の汚れを排除した場で瞬時に決まる勝負。これが日本人の文化意識の底流を象徴する形式である。

ドイツ語の **Sport** は肉体上の訓練に重きがある。学校の体育の授業も最近では **Sport** と呼ばれている。日本ではやはり厳粛な「体育」の時間であって、算数や国語と並べてスポーツと書くのにはやはり抵抗感がある。近年はドイツの町のあちこちに柔道 (**das Judo** 、ドイツ人はユードーと発音する) や空手 (**das Karate**) の道場があり、そこへ通う青少年も増えつつある。彼らをそこへ引きつける魅力は実用的自己防御の手段を覚えられるということにある。ボクシングやレスリングとまったく同じ次元でのスポーツとして受け入れられているのである。

結局、日本には **sport** の概念をはみだす伝統的格闘技があったために、私たちはいつの間にか「スポーツ」という語に敢て一定の枠をはめて使うようになった。一方、そのような枠付けを必要としないドイツ語の **Sport** は遙かに抱括的意味をもつ。

⑤8 Spot (男 -s / -s)

日本語として使われる「スポット」の意味を国語辞典や外来語辞典に依ってまとめると、最大公約数は次の五種になる。「㊦斑点、汚点。㊧場所、地点；(特に)飛行機の客の乗降する場所。㊨大きな水玉模様。㊩写真修正技術の一つ。㊪ラジオ、テレビのスポット・アナウンスやスポット・コマーシャルの略、またスポット・ライトの略。」 いずれも昭和になってから入ったものである。そして英語の名詞 spot がもつ数々の意味の主要部分を受け継いでいると言える。

これに対して、ドイツ語の Spot が表わす意味はただ一つ「スポット・コマーシャル、スポット・アナウンス」である。

⑤9 Step [ʃtɛp , stɛp] (男 -s / -e または -s)

すでに明治時代に伝来したこの外来語「ステップ」はほぼ次の意味で使われている。「㊦足取り、歩調、足の踏み出し。㊧電車・バスなどの昇降口の踏み段。㊨段階。㊩(登山)足場。」 これらの意味は英語の step が名詞としてもつ数々の意味の主要部分と重なっている。この中で一番親しみのあるのはやはり㊦であろう。「ステップを踏む」などとよく言う。「ダンスをする」と同義のハイカラな言い回しである。ダンスはダンスでもドイツ語の Step はダンスの種類、すなわち靴の底とかかとでリズムをとる step dance を指す。日本でふつつアップ・ダンスというあのダンスのことである。step dance は「ステップが最も重要な特徴であるダンス」という意味であり、tap dance は「ステップの音をよく聞こえるようにするための金具(tap)を付けた靴で踊るダンス」の意味で、どちらも同種のダンスを指す。前者の呼び名がドイツへ、後者の呼び名が日本へ伝わったのはなぜか。おそらく経路の違いに依るものと思われるが、詳細は不明。

⑥0 Stretch (男 - [es] / -es)

英語の stretch は名詞として「㊦伸ばす(伸びる)こと、張り。㊧広がり、範囲。㊨(競馬)直線コース、ホームストレッチ、バックストレッチ」を意味し、形容詞としては「㊦ストレッチの(伸縮性のある合繊・混紡糸製についていう)。㊧(紡績糸が)ストレッチの、伸縮加工を施された」の意味をもつ。形容詞の方はとくに stretch fabrics (ストレッチ織物)、stretch socks (ストレッチのソックス)、stretch girdle (ストレッチのガードル)などの用法で一般に使われている。伸縮性に富む布地は第二次大戦後の合成繊維の発達とともに世界的に普及した。したがって、ドイツや日本で Stretch という英語をこの意味で取り入れるようになったのもこの数十年來のことである。

外国の言葉はしばしば品物に付着して入ってくる。そして受け入れる側の国に類似の語が存在せず、誤解の恐れのない場合には、その呼び名の一部だけでその品物を指すようになるのも外来語受容には付きものの現象である。例えば glamour girl をわが国では単に「グラマー」だけで言い表わすようになったごとくに。さて、ドイツに伸縮性に富むストレッチ織物が stretch fabrics という名

称で伝わったわけだが、stretch と同音の語をもたないドイツでは、その品を表わすに stretch だけで十分であった。結局、もともと形容詞として用いられた英語の stretch がドイツでは名詞として取り入れられて、ストッキングなどのストレッチ織物そのものを意味する語となった。

合成繊維の受け入れ方については日本もドイツと同じ経験をしてきたから、日本語になった「ストレッチ」も名詞として「ストレッチ織物」を指すようになった。ただ、ドイツ語の stretch と違って日本語の「ストレッチ」は上記の意味が加わる少し以前から「競技場や競馬場などの直線コース」の意味でも使われてきた。こちらは名詞としての Stretch がもつ意味の一つを受け継いだものである。

⑥1 Stripper (男 -s/-)

英語の stripper は「㊦はく(むく)人。㊧はぎ道具、皮むき器。㊨(おもに米) ストリップショーの踊り子、ストリッパー。㊩脱穀機。㊪すきばけ」などの意味をもつ。ドイツ語になった Stripper の第一義は冶金技術語の Stripperkran と同じ、すなわち「固まった鋼塊から鑄型を引き上げるクレーン」の意味である。そして第二義として、上記㊨の意味をもつ。日本語の「ストリッパー」は言うまでもなく「ストリップショーの踊り子」を指す。英語 stripper の本来の意味に基く「野菜の皮むき器」の意味で使うこともあるが、使用頻度は前者よりも遙かに低い。

ドイツ語の Stripper はストリップガールの意味ではあまり使われない。とするとドイツにはこの種の踊り娘がいないのか、という疑問が生じるかもしれない。社会主義国である東ドイツではたしかにストリップショーを町で見るなどとてもできるものではない。しかし、ストリップショーを意味する Striptease という英語系外来語は結構紳士方の間に知れ渡っている。西ドイツではどうかというと、こちらは日本と同様お盛んなようだ。Striptease を簡単にした Strip (男 -s/-s) という略称もある。ちょうど日本で「ストリップ」という略称が生まれたのと似ている。さらに、「ストリップショーを演じる」という意味を表わすために英語の strip を基にして strippen なる自動詞まで作られた。こういった造語現象からみて、ストリッパーがいないはずはない。いれば呼び名もある。だが、Stripper ではその語形からどうしても男性名詞となって、実感がわきにくいせいだろうか、彼女らの呼び名としては、これの女性形 Stripperin や、或は Striptease に「踊り娘」を付けた Striptease-tänzerin が愛用されている。

⑥2 Swing (男 -[s]/)

日本語としての「スイング」はおおよそ次のような意味に使われる。「㊫野球でバットを、ゴルフでクラブを振ること。㊬(ボクシング) 腕を大きく振った横からの打撃、横なぐり。㊭(音楽) 軽い調子のリズム；ジャズ的なダンス音楽の演奏形式。」一方、ドイツ語としての Swing は上記の㊫、すなわちジャズの一形式名を表わす他に「景気の規則的変動」の意味にも使われる。これらの意

味はいずれも英語の *swing* によって表わされる意味の一部である。

日本語の「スイング」とドイツ語の *Swing* に共通する意味はジャズの形式名だけである。スポーツに関する意味はドイツ語の *Swing* に含まれず、経済上の意味は日本語の「スイング」に含まれていない。

③ Tip (男 -s/-s)

英語の *tip* は3～4通りに大別されるほど種々の意味を含んでいるが、ここではごく簡単にまとめよう。「①先、先端；先端につける物；(山などの)頂点、頂上。②チップ、心付け、祝儀。③(特に賭け・投機などの)内報、予想；助言；秘訣。④傾ける(傾く)こと；傾斜。⑤軽打；(野球)チップ。」ドイツ語の *Tip* は上記①～⑤のうち③の意味だけを汲んでいる。サッカー (*Fußball*) が日本のプロ野球と相撲を合わせたほどの人気をもつドイツでは「サッカー試合に関する種々の予報の意味で使われることが多い。それからまた、テレビ・ラジオなどのお知らせの時間に「お買物情報」といった感じでも使われている。そのような場合はたいてい複数形 *Tips* である。

日本語の「チップ」はドイツ語の *Tip* と異って、上記の②と⑤だけを受け継いでいる。つまり「心付け」と「(野球の)チップ」である。蛇足ながらポテトチップの「チップ」やルーレットの「チップ」(賭け札)は英語の *chip* からきているので、ここでは無関係である。

Tip と「チップ」はそれぞれドイツと日本で極めてひんばんに使われる同系外来語だが、相互にまったく別の事柄を意味しているわけである。

④ Toast (男 .-[e]s/-e または -s)

日本語で「トースト」と言えば「薄く切り、軽く焼いた食パン」(広辞苑)のことである。これ以外の意味に理解されることはまずない。英語の *toast* は名詞として2種類あり、一つは上記のパンのこと、もう一つは「乾杯の対象；乾杯の辞(音頭)」である。ドイツ語の *Toast* はこの両方とも受け継いでいる。その限りでは英語の *toast* がストレートに伝わったと言えるが、おもしろいことにドイツではさらに「トースト用に適した白パン」の塊も *Toast* と呼んでいる。現代英語 *toast* の語源となった中世英語の *tosten* は「こんがり焼く」の意だし、「乾杯」の意味で使われる *toast* も元はと言えば、風味を増すため酒杯に焼パンの1片を入れることからきているのであるから、焼く前のパン、それどころか薄く切る前のパンの塊(英語だと *loaf*)では *toast* の原意に合わない。古来ドイツには白パンを薄く切って焼いて食べる風習はない。白いパン自体がドイツ人にとっては、外国人用のパンと感じられる。英米風の *toast* を食する風習のない国だから、*Toast* の一語でトースト用白パンの塊を表わしても不都合はないわけである。

⑥ Twist

I (男 -es / -e) より糸。

II (男 -s / -s) ((ダンス)) ツイスト。

英語 twist の名詞としての意味をまとめると大体次のようである。「①それること、曲がり、くねり；回転、旋回。②より合わせること、より、よじれること。③らせん〔状〕、らせん運動。④強い絹のより糸。⑤((ダンス)) ツイスト(体をひねって踊る強烈な踊り。)」このうちの ③「より糸」はイギリスから直接ドイツへ渡って上記の Twist I となり、戦後になって「ダンスのツイスト」がアメリカからドイツへ渡って上記の Twist II となった。

ドイツ語の Twist と日本語の「ツイスト」で意味が重なるのはダンス名の方だけである。日本語の「ツイスト」には「より糸」の意味はない。その代りにドイツ語の Twist がもたない次のような意味を含んでいる。それは「球突きや体操などで、球にひねりを与えたり、体をひねって方向を変えたりすること」である。これもやはり英語の原意に則した意味である。

参 考 文 献

Duden, Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in sechs
Bänden, Bd. 1 – Bd. 6, Mannheim 1976 – 1981

Langenscheids Enzyklopädisches Wörterbuch
Deutsch-Englisch, 2, Auflage 1979

Meyers Enzyklopädisches Lexikon in 25 Bänden,
Mannheim 1976

Brockhaus Enzyklopädie in 20 Bänden, Wiesbaden 1971

Der große Duden, Band 5 Fremdwörterbuch,
Mannheim 1974

Der kleine Duden, Fremdwörterbuch, Mannheim 1977

Duden, Wie gebraucht man Fremdwörter richtig?
Mannheim 1970

Knaurs Fremdwörter-Lexikon, Droemer Knaur, 1978

Auf deutsch, Das Fremdwörterlexikon, Rowohlt 1974

Reclams Fremdwörterbuch, Philipp Reclam jun.
Stuttgart 1972

Großes Fremdwörterbuch, VEB Bibliographisches
Institut, Leipzig 1977

Kleines Fremdwörterbuch, VEB Verlag Enzyklopädie
Leipzig 1973

コンサイス外来語辞典、三省堂、第2版、1976

榎垣実編 増補外来語辞典、東京堂出版、第14版 1978

岡美千雄編著 常用外来語新辞典、梧桐書院、第7版 1980

吉沢典男著 図解外来語辞典、角川書店、初版 1979

吉沢典男著 外来語の語源、角川書店、初版 1979

日本国語大辞典 全20巻、小学館 1972 – 76

広辞苑、岩波書店、第2版 1969

小学館ランダムハウス英和大辞典 上下巻 第4版 1977

研究社新英和大辞典 第5版2刷 1981